

Facebook を授業外学習支援に利用した実践における 社会的存在感の変化

Change of Social Presence in Educational Practice with Facebook for Outside-of-classroom Support

山田 政寛^{*1} 合田美子^{*2}

Masanori YAMADA^{*1} Yoshiko GODA^{*2}

九州大学^{*1} 熊本大学^{*2}

Kyushu University, Kumamoto University

<あらまし> 本稿では Facebook (FB) を授業外学習支援に用いた授業において、「探求の共同体」フレームワーク、特に学習コミュニティの形成において基本的な要素となる社会的存在感に着目して、分析を行った。具体的には、社会的存在感に関する学習者の行動が、授業が進むにつれて、どう変わっていったのか質問紙により検討を行った。結果として、授業の最初の段階では FB と対面の両方において自己紹介などの自己開示が行われ、中盤・後半においては LINE や Twitter でグループを作ること、また議論中に反論するといったことも行うことも示された。

<キーワード> 協調学習, 社会的存在感, アクティブラーニング, ソーシャルメディア

1. はじめに

近年、問題解決学習やプロジェクト型学習といった協調学習の支援として、SNS 等のソーシャルメディアの利用が増えてきている。SNS 上にて、授業で行った議論、成果物の作成を継続的に行うことや受講者が収集した情報の共有など、受講者間の相互作用を活発化することを目的としていることが多い(Lampe et al, 2011)。しかし、活発な相互作用を継続的にするためには、クラス内、もしくはグループ内が学習を意識したコミュニティとなるようにデザインする必要がある。

本稿は「探求の共同体(Community of Inquiry)」フレームワーク(Garrison & Anderson, 2003)、特にコミュニティ形成の基本である、受講者の社会的関係構築に関わる社会的存在感が、授業が進むにつれてどのように変化し、また FB の利用の関わりについて分析を行った結果を報告する。

2. 「探求の共同体」フレームワーク

「探求の共同体」は学習の情意面に影響するとされる社会的存在感、議論の観点を提示するなど、学習成果に直接影響する認知的存在感、ルールの伝達等に関わる教授的存在感から構成される (Garrison & Anderson, 2003)。「探求の共同体」フレームワークでは社会的存在感を「使用しているコミュニケーション媒体を通じて、探究の共同体において実際にその場にいる人間(Real People)のように社会的に、且つ感情的に自己投影できる能力」と定義している。認知的存在感とは「批判的思考能力など、高次の能力育成に関係する談話を継続させる支援、イベント、またその知的支援環境」と定義される。例えば、問題を再認識す

る発言、相手と自分の意見を統合させる発言は認知的存在感に当たる。教授的存在感は「学習過程や成果を管理・監視をしながら、学習者のコミュニケーションを方向付けること」と定義される。例えば発言のルールを作る発言や各種作業の期限を決める発言などが含まれる。3 つの存在感により、「探究の共同体」は活性化し、パフォーマンスが高くなるとされる。その中でも社会的存在感は基本的な要素とされ、グループの状況を可視化するシステム開発(Yamada, 2010 など)や評価(Goda & Yamada 2012 など)に援用されている。

3. 授業内容と Facebook の活用

授業外学習支援の環境として、FB を利用した授業は 2 つであった。1 つはディスカッションスキルを習得することが目的とした授業であった。仮想の日本政府として、現在我が国が抱えている社会問題について政策を打ち、解決を検討するという文脈を与えている。解決する社会問題(議題)は教員から 3 つのテーマに絞るように指示される以外、指示はなく、受講者ら自身で決定した。決定したテーマ毎にグループを組むこととしたため、3 グループ形成された。グループ内で社会問題に関する現状分析、政策立案などを検討し、ディスカッションは他のグループメンバーと行う。具体的には各グループから 1 名ずつ出し、3 人 1 グループでディスカッションを行うものとなっている。ディスカッションの前に当日の学習目標を設定し、ディスカッション後にリフレクションを行い、学習目標の達成度、その理由、次回までに改善することを検討し、発表してもらう。現状分析、政策立案に伴う情報収集

やロジック構築は授業外にてチームで行い、共有をFB上で行うように指示した。またディスカッション後に行うリフレクションの内容もFB上で共有するように指示した。

もう1つの授業は企画提案型のプロジェクト学習を取り入れたものである。具体的には図書館内に設置されたラーニングコモンズをより充実化させるための企画を図書館職員に提案するものである。15回の授業の5回分を知識習得編とし、企画を作り上げるために必要な、関連知識を教える目的で行われた。後半の9回分をプロジェクト編とし、受講者たちが知識習得編で学んだ内容に基づいて、企画立案を行う。授業開始時に教員が進捗を確認した。最終回に図書館職員に向けて企画提案プレゼンテーションを行う。知識習得編では、授業で扱った内容に関して、内容の概要、自分の考え、質問等を書くミニツッペーパーをFB上に書き、共有するよう指示した。プロジェクト編では、授業内で完了できなかった活動や授業外に行うことを計画した活動をFBで行うよう指示した。両授業ともに、教員は授業資料のアップロード、ミニツッペーパーやリフレクションへのコメントを行い、受講生の活動そのものには介入していない。受講者から質問があれば、対面でもFB上でも対応を行った。

なお、社会的存在感に関する量的な分析について、経過報告は山田・合田(2013)で行っているため、本稿では自由記述データによる、社会的存在感の質的な変化について検討を行った。

4. 結果

それぞれの授業の受講者は、ディスカッションスキルが9名、プロジェクト型学習は5名であった。授業最終回後にWebによる質問紙にてデータ収集を行った。自由記述では、授業の前半(1回から5回)、中盤(6回から10回)、後半(11回から15回)にて、コミュニティの所属感を高めるために行ったことについて受講者に記述してもらった。前半ではFB上での活動について言及したのは2名であり、コメントをすることや「いいね!」ボタンを押す行為が行われたことを記述している。対面においては、自己紹介、うなずきながら話を聞く、授業外において対面で会うといった自己開示を中心に、お互いを受け入れ、認める行動について記述された。中盤ではFBでの活動について言及をしたのは4名であり、前半と変わらないが、友人関係を結んだものと思われるもの確認された。またLINEなどでグループを作成してコミュニケーションを行ったことも確認された。対面では情報共有のための情報収集活動を行うことや反論するといった行動について2名の学生が言及しており、学習コミュニティ

が発達していることがうかがえる。後半については9名がFB・対面に関係なく、人間関係の形成よりも、成果物作成の分担や意見のすりあわせなど認知的存在感に関わる活動を行っていることを述べている。

5. まとめと課題

本研究ではFBを授業外の学習支援ツールとして利用した授業において、コミュニティの所属感を高くするために受講者が行ったことがどのように変化したのか分析を行った。その結果、初めの段階では自己紹介を行うことやFB上でコメントや「いいね」ボタンを押すなど、お互いを受け入れる土台を対面とFB双方で作られた。授業が中盤、後半になるにつれ、反論、情報の集約、分業するといった認知的存在感にも関わるような行動がされるようになった。またLINE等、学習者に身近なアプリを使い、学習者のみのコミュニティを形成する行動も確認された。社会的存在感が質的に変化し得ることはShea et al.(2010)で示されているが、本研究によって、ソーシャルメディア上の機能がその変化の中でも見られ、具体的な議論に移り変わる点も確認した。

今後の課題としては、発言ログも含めた分析を進め、量的・質的データと突き合わせて検討を進める。また「いいね!」ボタンが押された数、利用したデバイスも分析材料として検討していく。

本研究は日本学術振興会 科学技術研究費補助金(課題番号25702008)の助成を受けている

<引用文献>

- Garrison, D. R. & Anderson, T.(2003). E-LEARNING in the 21st century - A Framework for Research and Practice, RoutledgeFalmer, London, UK.
- Goda, Y. & Yamada, M. (2013). Application of Col to Design CSDL for EFL Online Asynchronous Discussion. In Z. Akyol, & D. Garrison (Eds.), *Educational Communities of Inquiry: Theoretical Framework, Research and Practice* (pp. 295-316). Hershey, PA: Information Science Reference. doi:10.4018/978-1-4666-2110-7.ch014
- Lampe, C., Wohn, D. Y., Vitak, J., Ellison, N. B., Wash, R. (2011). Student use of Facebook for organizing collaborative classroom activities, *International Journal of Computer Supported Collaborative Learning*, 6: 329-347
- Shea, P., Hayes, S., Vickers, J., Gozza-Cohen, M., Uzuner, S., Mehta, R., Valchova, A.& Rangan, P. (2010). A re-examination of the community of inquiry framework: Social network and content analysis, *The Internet and Higher Education*, 13: 10-21
- Yamada, M. (2010). The Development and Evaluation of CSDL based on Social Presence, *Proceedings of e-Learn 2010 - World Conference on E-Learning in Corporate, Government, Healthcare & Higher Education*, 2304-2309
- Yamada, M. & Akahori, K. (2007). Factors Raising Consciousness of Target in Learner-Centered Communicative Language Learning Using Videoconferencing. In C. Montgomerie & J. Seale (Eds.), *Proceedings of World Conference on Educational Multimedia, Hypermedia and Telecommunications 2007* (pp. 3828-3836). Chesapeake, VA: AACE.
- 山田政寛・合田美子 (2013) 協調学習を導入した授業におけるFacebookの利用:「探求の共同体」フレームワークによる学習コミュニティの評価, 教育システム情報学会第38

回全国大会講演論文集, 印刷中